

# 公表用要約データ

京都大学大学院文学研究科東洋史学専修 齋藤賢

本論文は戦国史研究の最重要史料たる『史記』戦国史記述の史料的性格を明らかにすることを目的として、『史記』の編纂方法を検討するものである。

中国戦国時代は、急激な経済成長や重大な社会変革、経済・戦争・行政技術の分野での革新などが生じたとされ、中国史上の画期の一つに数えられる。しかしながら、現在は戦国時代の前～中期や秦以外の諸国家に関する研究に停滞が見られ、戦国末期と戦国前～中期や春秋・秦漢時代との連関といった巨視的な観点の欠如や中国史全体としての流れが分断されつつあることが克服すべき課題となっている。

この戦国時代前～中期や秦以外の研究の停滞の一因として、戦国時代関連の史料の不足が挙げられる。確かに、戦国～統一秦の法制や秦漢代の下層官吏の行政手続きといった個別の分野の史料状況は、近年における出土資料の発見により著しく改善されたと言えるが、戦国時代を通時的に記述した史料について言えば、ほとんど変化は見られない。

かかる史料状況からすれば、戦国時代の通時的理解には『史記』が現在も依然として最も主要な基礎史料であることは論を俟たないだろう。というのも、戦国時代の前後に位置する春秋期・前漢期の研究に際しては、『春秋左氏伝』や『漢書』といった編年の史料が利用可能であるのに比して、戦国時代については『史記』が現状唯一の編年的・体系的史料であるからである。しかし、かかる重要性を持つにも拘らず、『史記』の戦国時代関連の記述には矛盾や紀年の錯誤など種々の問題が山積し、戦国史史料としての利用に困難を伴ってきた。戦国史研究の偏向と停滞は實にこの史料的問題に由来すると言うことができる。

本論文は、かかる問題意識に基づき、戦国中期の人物を記述した三列伝－蘇秦・孟嘗君・張儀列伝－の編纂方法の分析を通して『史記』の史料的性格を考察するものである。なお、『史記』に複数ある戦国関連篇章の中でも特にこの三篇を選んだことについては、戦国中期以降に関連する史料が前期に比べて豊富であること、及び紀年修正の最重要史料である古本『竹書紀年』に前 299 年以前までの記録しかないことから、後期については『史記』の編纂方法を探る重要な手掛りである紀年の矛盾が利用できないこと等が主な理由となる。また、この三者は秦との関連という点からみても各々差異があり、それは即ち『史記』戦国部分の基礎となったとされる秦系資料における扱いも異なってくるということの意味している。

まず、第一章「蘇秦列伝の成立」では、『史記』の戦国時代関連の記述の中でも、最も矛盾が甚だしく、記述の信憑性について従来議論の紛糾していた蘇秦列伝を検討の対象とする。また、本章では蘇秦列伝の中でも、特に蘇秦の事績について記した部分(以下「蘇秦伝」)を分析する。

蘇秦の事績とその活動年代については、従来種々の見解が提出されてきたが、大別すれば①『史記』の記述に基本的に従う説、②蘇秦なる人物とその事績を全くの虚構と考える説、③蘇秦の活動年代については『史記』に従うが、合従擯秦の事績は無かったとする説、④蘇秦の活動年代をより降った年代に想定する説、の四つに分かれる。この四説のうち、『戦国縦横家書』が発見されて以後は④が有力となるが、『史記』の記述を重視する研究者もなお存在し、見解の一致を見ていなかった。その原因が『史記』蘇秦列伝の記述の信頼性を如何に評価するか、と言う点にあり、それ故にこそ見解が岐れているのは明らかである。本章ではかかる問題意識に基づき、蘇秦列伝がどのような史料を如何に利用して編纂されたものであるのか、その編纂方法を解明することでこの問題に一定の解決を与えることを試みた。

第一節「蘇秦伝の構造」では蘇秦伝前半部の栄達説話、及び後半部の齊燕反間説話につき、各々の原資料と改変部分、及びその原因について考察する。また蘇秦伝の説話展開には原資料と比べて不自然な点が認められるが、それは蘇秦伝編纂に際して、起源を異にする説話を複数結合したことに由来することを示した。第二節「蘇秦説話の展開」では齊湣王の敗滅から『史記』編纂時に至るまでの蘇秦の形象・説話の変遷と展開を検討し、蘇秦に関する説話のうち、齊敗滅に関わる説話がより早期に発生し、次いで合従擯秦の説話が展開したと考察した。また、合従連衡に関する認識の形成過程を辿り、恐らく前漢前期頃に蘇秦(合従)と張儀(連衡)、という縦横家の両雄としての構図が作り上げられたことを指摘している。次いで第三節「太史公と蘇秦伝」では、前二節での考察に基づき、太史公が蘇秦伝を著した意図、及びその史料選択の方針と具体的な改変方法を検討する。蘇秦列伝編纂の意図は太史公曰や太史公自序に拠れば、蘇秦の悪名を取り除くことに在ったと考えられる。

以上の検討により、本章では蘇秦列伝の編纂に際して、『史記』編纂時まで成立した多様な説話資料を用いたことを明らかにする。また、原資料の改変を含む編纂方法の分析により、蘇秦列伝の記述をそのまま史実と認めることは最早困難であること、しかしその一方で、蘇秦伝編纂に際しては、太史公の戦国史認識に整合しない資料であっても一律に排除したわけではなく、何らかの形で保存している場合があり、『史記』が戦国史研究の貴重な史料となり得ることを指摘した。

第二章「孟嘗君列伝の構造」では六国と秦のいずれとも関係を持つ戦国中期の人物の伝記として、孟嘗君列伝を取り上げる。孟嘗君は主に六国で活動したという点においては、前章で対象とした蘇秦に類するが、一方で秦相となった事績が示すように、秦國においても活動した点では蘇秦と異なっている。

第一節「馮驩説話」では孟嘗君列伝の末尾に附された馮驩説話を検討する。『史記』の馮驩説話は『戦国策』齊策二に内容の類する馮諼説話が載録されており、両説話の比較検討を通して『史記』孟嘗君列伝の構成に関わる記術の異同を指摘し、次節以降の導論とする。その異同とは①紀年が特定可能か否か、②孟嘗君が齊相を廃された原因、③孟嘗君が

廃された後の馮驩(馮諼)の遊説先、の三つであり、孟嘗君列伝の馮驩説話が『史記』の孟嘗君に関する認識に適合する記述となっていることを考察する。第二節「靖郭君田嬰」では列伝冒頭部の、孟嘗君の父・靖郭君田嬰に関する記述を検討する。列伝の田嬰に関する記述については、紀年の錯誤による世系の改変を指摘し、且つ田敬仲完世家の記述を要約した形式になっていることから、田敬仲完世家の完成後に孟嘗君列伝がそれを参照しつつ編纂されたものである可能性が高いことを指摘した。第三節「孟嘗君田文」は、列伝の中心となる孟嘗君の事績を記した部分を検討する。その結果、孟嘗君の事績に関する部分は基本的に『史記』の他箇所との記述と矛盾しないが、原資料や他史料と比較した結果、個々の記述の信憑性に関しては疑わしい部分があり、列伝の紀年が基本的に『史記』の他箇所との記述と矛盾しないのは、『史記』が自己の戦国史認識に基づいて諸資料を配列したためであることを指摘した。以上の三節に亘る検討に基づき、第四節「孟嘗君列伝編纂の特徴」では、『史記』においては孟嘗君の魏における活動が(恐らく意図的に)ほぼ抹消されていること、及びその編纂方針が『史記』編纂時に利用可能であった史料の偏りに因るのではないことを指摘した。なお、孟嘗君の魏における活動の記述が『史記』ではほぼ姿を消していることについては、蘇秦に関する『史記』の認識の影響を受けていたことが原因の一つと考えられる。

第三章「張儀列伝の編纂」では前二章と異なり、主に秦で活動した人物の列伝として、張儀列伝を検討対象とする。第一節「張儀列伝の構成」では、張儀列伝の記述と構成を、①張儀と蘇秦との関わり、②張儀の秦相としての活動、③張儀の魏相としての活動、及び④張儀の楚における活動、の四部分に整理して分析した。その結果、張儀の秦における活動以外の記述については信憑性に問題があり、かつ秦における活動についても、説話資料から仮構されたと思しき箇所が存在し、必ずしも秦系列伝であるからという理由のみで信憑性を高く評価することはできないこと、及び史料として利用する際には、個々の記述を個別に検討する必要があることを指摘した。次いで、第二節「張儀の六国説辞」では張儀が魏・韓・趙・楚・齊・燕に説いたとされる遊説辞(六国説辞)、及び張儀の行ったとされる連衡策について分析する。張儀の六国説辞は、元来は六国の君主に対するほぼ同時期の遊説を想定して作られたものであるが、張儀列伝では叙述の整合性を図って、六国説辞を異なる年次に分割しており、張儀列伝の連衡に関する記述は信憑性に欠けること、及び張儀列伝の連衡に関する記述は『史記』の蘇秦に関する年代観や認識に影響を受けてなされたものであることを考察した。第三節「張儀像の変遷」では『史記』に至るまでの張儀関連史料の検討を通して、張儀像の変遷過程を辿る。張儀は同時代的に著名な人物であったと考えられるが、元来は連衡策と何らの関係も認められない。しかし、漢初頃には連衡を秦の有力な人物に関連付ける事例が現れ、それに伴い漢武帝期には蘇秦の合従と張儀の連衡という図式が既に生じていたことを指摘する。

第四章「『史記』と蘇代」では『史記』における蘇代・蘇厲の記述を手がかりとして、蘇代なる人物がどのような特徴を持った人物であるかを明らかにし、蘇代説話の展開と

『史記』との関わりを考察する。

第一節「『史記』における蘇代」では、他史料において蘇秦、或いは他の人物の行動として記されているされている説話が、『史記』においては蘇代の説話とされている例が多数認められることを確認し、恐らくはこれらの事例の多くが『史記』編纂段階で蘇代に書き換えられたのであろうことを指摘する。本節では、原資料において蘇秦とされていた人物が、年代観の齟齬などの原因から『史記』において他者に書き換えられる場合、若干の例外を除き、原則的に蘇代へと変更されたことが確認される。次いで、第二節「蘇代の特徴－蘇厲との比較を通して－」では蘇厲との比較を通して、蘇代に関する史料と記述の特徴を検討し、蘇代という人物が蘇秦説話において特殊な立ち位置に居ること、具体的には、蘇代が蘇厲とは異なり、蘇秦説話においても比較的後出の存在であることを確認する。第三節「蘇秦の代替者・蘇代」では、蘇秦説話の展開初期における蘇代の不在ともいえる状況を前提に、蘇秦と蘇代には、内容が共通するにもかかわらず人名だけが異なる説話があることを確認し、蘇秦説話の発展とともに蘇秦の活動が複雑化・多様化したことを受けて、その行動の一部を荷う存在として蘇代なる人物が創出された可能性を指摘し、その時期については早くとも戦国末、恐らくは漢初以降と考えられるのではないかと推定した。

以上の考察から、原資料の蘇秦が『史記』において蘇代に書き換えられているという現象は、前漢代における蘇秦説話の展開と拡大を背景としたものであり、その意味では、太史公が彼の同時代的な認識の影響を受け、且つそれを一層推し進める形で『史記』を著したことがわかる。

終章では、第一章～第四章から得られた各知見を総合し、三列伝の編纂方法の特徴を指摘した。三列伝編纂上の特徴として、利用された原資料が多少なりとも改変を被っていることが挙げられるが、これらは『史記』編纂段階において、独自の戦国史認識に沿う形で為された改変であると考えられる。しかしその一方で、同じく三列伝に共通する特徴として、種々の原資料の認識をできるだけ保存しようとする編纂方針の存在も認められる。即ち、『史記』においては独自の戦国史認識に拠って原資料が改変されたことにより、各人物に関わる重要な事績をそのまま載録することが困難となっても、その認識に抵触する原資料を一律に放棄するのではなく、なんらかの方法で保存している事例が存在するのである。また、三列伝の分析に拠れば、『史記』の年表や紀年形式の記述の中には、紀年資料を採用した記述以外にも、説話資料から得た認識を付加したものや、事件を仮構した例、及び元来は年次不明であった事件を『史記』段階で特定の年次に繫続した例などが存在する。それ故、『史記』を分析するには、単に秦関連の記述であるか否か、などといったことにのみ基づいてその記述の信頼性を判断することは不可能と言うべきである。

『史記』を歴史学の史料として活用するには、『史記』を現在ある姿を固定したものとして捉える静態的な視点から検討するだけでは不十分であり、ある記述が『史記』編纂のどの段階でなされたのか、その時点で如何なる史料に拠り、どのような認識によって改変

が加えられたのか、を動的に考察・分析する必要がある。本論文はかかる動的視点から『史記』の史料的性格の一端を明らかにしたものとなる。

上述の如く、『史記』には原資料を改変して利用した部分が多いが、その一方で原資料の認識を極力維持しようとした箇所も認められる。『史記』は原資料の改変と維持、この二つの方針が複雑に絡み合いながら編纂された書とすることができるだろう。